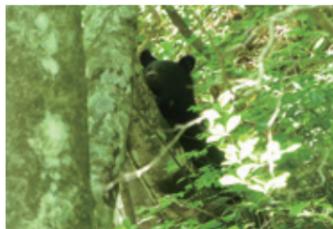


9 ツキノワグマ地域個体群の保護管理 (島根・広島・山口)



島根・広島・山口の3県にまたがる「西中国地域のツキノワグマ」の保護管理を進めるために、クマの目撃等の情報から分布域を把握し、さらにカメラトラップ法を用いて西中国山地における生息数を推定しました。これらの調査結果を特定鳥獣保護・管理計画に反映させ、クマとの共存を図っています。

8 大台ヶ原自然再生 (奈良・三重)



台風による倒木、ニホンジカの個体数の増加、利用者の増加など、複合的な要因により衰退してしまった大台ヶ原の森林生態系を、昭和30年代前半までの姿へ再生することを目指して自然再生が進められています。当センターは、ニホンジカの個体数調整や植生の回復に伴う動物相等の変化を把握するための様々なモニタリング調査を実施しています。

10 ツシマヤマネコの生息状況調査・ツマアカスズメバチ駆除(対馬)



国内希少野生動物種であるツシマヤマネコについて、環境省が実施する保護増殖事業として、1984(昭和59)年度以降、分布や生息密度等を把握するための生息状況調査を実施してきました。また2012(平成24)年に対馬市で国内において初めて確認された特定外来生物ツマアカスズメバチについて、防除作業やモニタリングを行うと共に、地域住民による大規模な防除の支援等も実施しています。

11 ニホンジカ管理計画 (宮崎)



各地の森林や中山間地で農林業被害や自然植生への甚大な影響を発生させているニホンジカを対象として、人との軋轢を軽減するための調査を実施しています。宮崎県全域を対象とした生息密度や分布状況等の生息状況の調査、個体数の推定や将来予測の実施、管理施策の提案、特定鳥獣保護・管理計画の策定支援を行いました。

12 世界自然遺産登録・マンブース防除 (沖縄・奄美)



2021(令和3)年7月に、奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島は世界自然遺産に登録されました。当センターでは、暫定リストへの掲載、推薦書の作成、IUCNによる現地調査、世界遺産委員会での審議等、登録までの一連の過程を支援しました。また奄美大島の固有種を捕食し、その生息を脅かしているマンブース防除に1996(平成8)年から取り組んでおり、わなの開発や探索犬の導入等といった様々な工夫により成果を上げ、全島からの根絶寸前まで来ています。

13 エトピリカ保護増殖事業 (北海道)



エトピリカは、かつて道東の島々で繁殖していましたが、近年生息環境等の悪化により、国内における生息個体数が急激に減少している状況にありました。このエトピリカに関する保護増殖事業の一環として、近年まで繁殖が確認されているコルリ島及びモルリ島における海鳥類調査、ドブネズミの駆除等を実施するとともに、国内飼育個体の野外導入に関する検討や情報収集を行いました。

14 指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定業務 (千葉)



千葉県内で分布が拡大し、人間との軋轢が生じているニホンジカ、イノシシを対象に、農林業被害の低減と、適切な個体数管理を目指して指定管理鳥獣捕獲等事業の評価と事業計画の策定をしました。また、各種モニタリング調査の結果に基づき捕獲効果の検証と個体数密度の推定を行い、次年度の事業計画へ反映させています。

15 モニタリングサイト1000サンゴ礁 (長崎・高知ほか)



国内のサンゴ礁・サンゴ群集の状態を長期的かつ定期的にモニタリングすることでサンゴ礁生態系の変化等を検出し、適切な自然環境保全施策に活かすため、館山から西表島まで全国に配置された26のサイトで現地の方々と協力して調査を行っています。調査ではサンゴの被度やサンゴを食べるオニヒトデや巻貝、高水温によるサンゴの白化の程度などについて調べており、これによってサンゴ礁生態系の状態を記録しています。

7 キョン防除 (伊豆大島)



伊豆大島では、特定外来生物キョンの個体数増加に伴い自然植生への影響や農作物被害などの問題が起きています。当センターでは、探索犬を用いた効率的な銃器捕獲、新規捕獲手法の開発や運用、防除事業実施計画の立案、事業全体のコーディネートに関わっています。

6 高山帯ニホンジカ対策 (南アルプス)



南アルプスでは、1990年代末からニホンジカによる高山・亜高山帯への影響が急速に拡大し、生態系の攪乱は深刻なものとなっています。当センターでは、ニホンジカの生息状況や植生への影響を調査するとともに、高山・亜高山帯でのニホンジカの捕獲方法の検討を行うほか、標高2700m付近(仙丈ヶ岳・馬ノ背)での捕獲も実施しています。



1 高病原性鳥インフルエンザ緊急調査 (北海道・兵庫ほか)



2004(平成16)年に79年ぶりに日本で高病原性鳥インフルエンザが発生して以来、冬期には散発的に発生が確認されていましたが、近年は毎年のように発生しており、養鶏場のニワトリのほか、猛禽類やツル類などの希少種を含む様々な野鳥で高病原性鳥インフルエンザによる死亡が確認されています。当センターでは、発生地点周辺に生息する野鳥のウイルス保有状況等を把握する緊急調査を、約20年間にわたり日本各地で実施しています。

2 カモシカ特別調査 (岩手・岐阜・大分ほか)



全国13地域にカモシカ保護地域が設定され(四国と九州は設定準備中)、カモシカの保護が図られています。当センターでは、各地の保護地域において、カモシカ地域個体群を安定的に維持し、適切に保護管理するために、分布調査、生息密度調査、生息環境調査等を実施し、カモシカ個体群の保護管理に貢献しています。

3 震災後の福島県における調査 (福島)



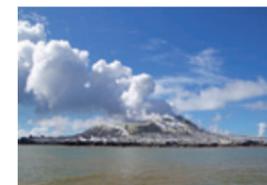
2011(平成23)年3月の東日本大震災に起因する福島第一原発事故の影響によって設定された帰還困難区域等で、住民の帰還に向け、日常生活や農業生産に支障をもたらすイノシシ、アライグマ、ハクビシンの捕獲を進めています。また、捕獲による効果を科学的に検証するために、センサーカメラを用いた調査によって個体群の動態を評価しています。

4 トキ野生復帰モニタリング (佐渡島)



当センターでは佐渡に現地事務所を設けて、2008(平成20)年の第1回トキ放鳥以降、放鳥個体を追跡したり、繁殖状況を継続的に調査するなど、トキの野生復帰に向けた業務に取り組んでいます。得られたモニタリングデータを活用し、捕食者対策や放鳥方法の検討を行うことによって、野生下での繁殖にも成功するようになり、野外におけるトキの個体数は2023(令和5)年末には推定で532個体にまで増加しました。

5 希少種保全・外来種対策・西之島学術調査 (小笠原諸島)



外来種等の影響により絶滅の危機に瀕している小笠原固有の陸産貝類(カタツムリ)やオガサワラハンミョウについて、飼育下で増やし、一部の種では元の生息地で野生復帰を進めています。クマネズミやグリーンアノールなど、希少種の減少要因となる外来種についても対策に取り組んでいます。また、2013(平成25)年以降の噴火により生態系がリセットされた西之島では、原初の生態系の生物相等を明らかにするため総合学術調査を実施しています。